

第4分科会 | 子どものケアニーズに応じた支援

午前「不登校問題を切り口に考える養育支援」

＜報告者＞児童養護施設 池島寮 児童指導員 樋口 亮介 氏

昨今、社会的養護を必要としている児童のケアニーズは多様化かつ複雑化しています。アタッチメント形成や発達に課題を抱えている児童はその日常生活のみならず、学校への登校に対しても強い困難と課題を抱えています。そんな児童に対し、どのような支援が求められているのか、実践例を基に、より具体的に掘り下げます。

午後「大人への不信感を持つ子どもへの支援 ～個別調理活動を中心に～」

＜報告者＞川崎こども心理ケアセンターかなで セラピスト 鳥越 ちひろ 氏・生活指導員 日比 はるか 氏

かなででは、集団生活でのケアを中心に置きながら、こどもの背景に合わせて個別活動も行っている。こどもに希望を聞く中で出てきた個別調理に力を入れ、セラピスト・指導員の立場からケアを行った。両者の視点を明確にしつつ、違いを共有することで、こどもの多角的な理解に繋がった。本講座ではこの取り組みによる成果を中心に報告する。

第5分科会 | 青年期の自立

午前「家庭の崩壊や虐待をなかったことにせず前に進める居場所と出番を」

～自立援助ホーム「あらんの家」と「ミモザの家」の活動を通して～

＜報告者＞児童自立援助ホーム あらんの家・ミモザの家 統括施設長 浜田 進士 氏

奈良県で初めて自立援助ホームを開設して10年。「子どもにはチカラがある」「どんなに傷ついた子どもも、きっと元気になれる」「子どもひとり一人が元気になれば、社会もきっと元気になる」ことを大切に活動してきました。

インケア、リービングケア、アフターケアの様子を紹介します。

午後「社会的養護経験者の視点から自立について考える」

＜報告者＞CVV 中村 みどり 氏・社会的養護経験者

＜コーディネーター＞大阪人間科学大学 心理学部 助教 荒屋 昌弘 氏

社会的養護経験者の「自立」についてのイメージは、“人に頼らずに生きていくこと”、“漠然とした不安”という声をよく聴きます。社会へ出ていく時、施設から離れても頼れるおとなや場所があると思えると、若者たちの自立へのイメージは変化するのではないのでしょうか。改めて、経験者とともに「自立」について考えてみませんか。

第6分科会 | これからの家庭(的)養護

午前「社会的養育を推進するための施設で連携した取り組み」

＜報告者＞児童養護施設 清心寮 副施設長 井筒 貴史 氏

子ども家庭支援センター清心寮 相談支援員 安原 由依 氏

施設へ入所する子を減らす、退所した子が地域で暮らし続ける、施設卒業生の虐待の連鎖を防ぐために、それぞれの施設機能を生かした展開が必要ではないかと思っています。

児童養護施設と児童家庭支援センターが互いに頼りながら、施設の子の養育にとどまらず、地域の子も含めて健全育成に取り組んでいくための策を考えていきたいです。

午後「ファミリーホームでの家庭(的)養護と、家庭養護を支援するファミリーホームの存在」

＜報告者＞ファミリーホーム ワンズハウス 養育者 小松 拓海 氏

養育里親、乳児院、児童養護施設の職員経験を経て、2013年から神戸市でファミリーホームを運営しています。この10年間で37名の児童の委託がありました。また、夫婦でNPO法人を立ち上げ、地域支援にも取り組んでいます。ファミリーホームを中心とした、地域支援の実例報告を通して、これからの家庭(的)養護の在り方を考えたいと思います。

記念シンポジウム

仲間と語り合おう、考え合おう社会的養護の課題と展望を～養問研の宝「実践指針」を考える～

＜シンポジスト＞

児童養護施設 迦陵園 施設長 若林 里仁 氏

児童養護施設 ゆうりん 施設長 小尾 康友 氏

一般社団法人たすけあい 代表理事 田中 れいか 氏

児童養護施設 つばさ園 ゆずの木ホーム 保育士 二井 夢香 氏

＜コーディネーター＞全国児童養護問題研究会 会長 武藤 素明

このコロナ下で語り合う場やコミュニケーションの場が極端に減ってしまったこの三年間ですが、第一回大会のテーマに立ち戻り、今大会テーマである「仲間と語り合おう、考え合おう社会的養護の課題と展望を」にそって、若い施設長、職員、社会的養護経験者の代表から今の社会的養護の現状や課題など発題していただきます。

さらには、養問研が1989年に取りまとめた「児童養護の実践指針」の改定についてもシンポジストから意見をいただくとともに、これからの未来の社会的養護の展望についても大いに語っていただきます。短時間ではありますが許す限り会場の皆様にも参画していただく予定です。

特別講座

「50年を振り返り今後の養問研を展望する」

全国児童養護問題研究会 会長 武藤 素明、副会長 石塚 かおる、副会長 遠藤 由美、監事 山口 薫

まだまだ“子どもの人権”という言葉さえも知られていなかった1972年。「施設は家庭に勝るとも劣るものではない、施設の主人公は子どもであり、主体的に生活をつくり上げていくもの」という意見表明をした積性勝が会長となり、養問研は始まりました。

そこから約50年。この間に子どもの権利条約の制定や児童福祉法改正、児童虐待防止法施行と改正、親権に関する民法改正や少年法改正…。そして何よりも子どもや家族が置かれている社会状況の変化。この時代のなかで養問研は“未来をにう子どもたちに 仲間とつくりよう豊かな実践を”を理念として活動しています。今回の全国大会では50回の節目として、これまでの養問研の50年のあゆみを振り返るとともに、これからの展望について仲間と語り合いたいと思います。

児童福祉講座

A 子どもの生活づくり～児童養護への招待～

東京都:児童養護施設 二葉むさしが丘学園 本園主任 田崎 加織 氏

「『生活』において大事にしたいこととは。」

子どもたちと関わり、ともに生活を送る中で(または社会的養護に興味を抱く中で)、自分自身が子どもたちにどのように関わっていききたいのか、何を大事にしていきたいのかを問われる場面は少なくないかと思います。私自身のこれまでの実践報告とともに皆さんの思いも共有しながら、“子どもの生活づくり”について一緒に考えていききたいと思います。

B 豊かな人間関係づくり

愛知県:名古屋大学 学生支援本部 准教授 工藤 晋平 氏

「子どもの行動問題と大人のケア」

アタッチメントの視点に立つと、子どもの示す行動問題は苦しみを和らげる、生き残りのための解決法であることが分かります。「親子関係の理論」ではない、「安心感の理論」としてのアタッチメントの観点から、育ちの中で形成される心の階層モデルと養育場面におけるその使い方について、臨床描写を交えながらお話しします。

C 援助者としてのそだちあい

日本福祉大学 社会福祉学部 教授 堀場 純矢 氏

「児童養護施設における職員集団づくりと職員の確保・育成」

児童養護施設は、職員同士の価値観がぶつかりやすい職場ですが、近年、小規模化が進むなかで職員集団づくりや職員の確保・育成が困難になっています。そこで、本講座では価値観をすり合わせるためのグループワークや相談ロールプレイをしたうえで、小規模化の影響に関する調査結果を踏まえて、職員集団づくりと職員の確保・育成の方法について取り上げます。

D 子どものケアニーズに応じた支援

くわな心理相談室 主宰 臨床心理士 鈴木 誠 氏

「支援者自身の『こころの痛みから学ぶ』方法—ワークディスカッション—」

職員は日常的に子どもの虐待トラウマに曝されて、強いダメージを受けています。これが、職員個人のメンタルヘルスや施設の間人関係の問題を生み出す一因となっています。子どもの『こころの痛み』が職員に投影されているのです。このプロセスを活用した対人援助スキル向上の訓練である『ワークディスカッション』を紹介します。

E 青年期の自立支援

児童養護施設 子供の家 施設長 早川 悟司 氏

「新たな制度のフル活用による『主体的自立』の保障」

2024年の改正児童福祉法施行を前に、2023年から入所支援継続の年限(22歳年度末)が撤廃されます。しかし、現状は20歳までの措置延長も十分に広がっていません。本人不在で「強いられる自立」は社会的養護はじまって以来の大きな課題です。「主体的自立」を保障し、貧困や虐待の世代間格差を止めるための手立てを考えます。

F これからの家庭(的)養護

社会福祉法人小鳩会 理事長 山本 朝美 氏

「0歳から社会人まで 人生に寄り添うチームをつくる(里親と施設)」

人は多くの寄り添いの中で、自らの力で人生を歩んでいきます。子ども達の人生に途切れることなく寄り添い続けるチームを作る。里親や施設がチームを組む時互いに一番心強い存在であるために、関係性を築き上げていくのが里親支援機関、日々の養育にかかわる施設職員の役割です。互いの強みを活かした相互連携について、皆さんと考えていきたいと思います。

G 施設内の専門職との連携

児童養護施設 子供の家 統括職・心理職 檜原 真也 氏

「施設職員の専門性と多職種連携」

児童養護施設では、家庭であれば親が行うことを、保護者に代わって(あるいは保護者と力をあわせて)、さまざまな大人同士が協力しながらチームで成し遂げようと努めています。本分科会では、施設職員の多様な仕事とその専門性について考えるとともに、他職種連携の意義や課題について考えます。

H 今後の社会的養護のあり方

いぶき法律事務所 弁護士 岩佐 嘉彦 氏

「今後の社会的養護のあり方について～ 弁護士からの視点」

「子どもの権利」というキーワードは、社会的養護における子どもに対する寄りそい・支援の物差しとなり、子ども達が主体的に生きる基盤になる。国連の子どもの権利条約や2021年に国連子どもの権利委員会で開かれた「子どもの権利及び代替養育に関する討議」の結果を参考にしながら、今後の社会的養護について考えたい。

分科会

第1分科会 | 子どもの生活づくり

午前「子どもとともに日々の生活を繋いでいくには」

＜報告者＞児童養護施設 つつじが丘学舎 保育士 山本 愛梨 氏

児童心理治療施設 みらい 児童指導員 北山 貴敏 氏

つつじヶ丘学舎が小舎制から小規模グループケアへと移行する中で、家庭的養護とは何かを考え、生活にアタッチメントの視点を取り入れた養育を実施し、子ども一人ひとりに合わせた生活作り、皆が安心して生活出来る集団作りを実践した課題や評価。担当職員の大異動による職員と子どもの混乱から、繋がりのある養育について考えていきたいです。

午後「子どもたちとの生活をふりかえって」

＜報告者＞児童養護施設 迦陵園 主任リーダー 松本 悟史 氏・ケアチーフ 木村 剛士 氏

10数年前に若い職員集団になり、一から子どもに向き合おうと模索する日々の中では様々なことがありました。

苦楽を共にする生活の中で、子どもたちのニーズを捉え、個別ケアやルールの見直しなどの実践を重ねてきました。私たちが過ごした子どもたちとの生活を振り返りながら、参加者の皆様との分かち合いを行いたいと思います。

第2分科会 | 豊かな人間関係づくり

午前「国立児童自立支援施設のニーズと支援状況」

＜報告者＞児童自立支援施設 国立武蔵野学院 厚生労働教官 関根 祥子 氏

国内には男女別に各1施設の国立児童自立支援施設があります。社会的養護の中でも最もケアニーズが高いとされる子どもたちに対して、現場ではどのような支援が展開されているのか。また、退所後にはどのように地域社会へ戻っていくのか。現状や課題を共有します。

午後「自分自身を大切にすることについて ～性教育(MIC TIME)を通して～」

＜報告者＞児童養護施設 丸石こどもの家 施設長 藤原 みどり 氏

丸石こどもの家では、独自の性教育(MIC TIME)を行っています。このMIC TIMEを通して、子ども職員も、自分自身を大切にすることと共に、他人への思いやりや他人も大切にすることを学びます。また、“バースデイお出掛け”の実施により、子どもと職員の1対1の時間を大切にしています。

MIC TIMEは、1年間のスケジュールに沿って行っており、その取り組みについて報告いたします。

第3分科会 | 援助者としてのそだちあい

午前午後連続プログラム「働き続けられる職場環境づくり」

小規模化が進む社会的養護施設。職員のみなさんは、子どもの養育やケアにかかわって悩みを抱え、試行錯誤の日々を過ごしておられると思います。報告者は勤続年数が5年ほどの職員です。後輩を育成するという新たな役割を担うようにもなりました。勤続年数が3年から5年のみなさん、「働き続けられる職場環境づくり」を語り合いませんか。

＜コーディネーター＞佛敎大学 社会福祉学部 准教授 長瀬 正子 氏

「OJT制度を通じて」＜報告者＞児童養護施設 高鷲学園 児童指導員 谷口 未来 氏

高鷲学園ではOJT制度を活用しています。働き出して4年が経ち、OJTを受ける側から後輩へOJTをする側となりました。今まで受ける側では感じる事なかった後輩育成をするにあたってのOJT制度活用の難しさ。その中で反省や葛藤、嬉しさなどをお伝え出来ればと思っています。そして、今後どのようにOJT制度をより良いものに出来るのかなども話し合える場に出来たらと考えています。

「長く働き続けるために」＜報告者＞乳児院 くるみ乳児院 保育士 島ノ江 幸恵 氏

ローテーション勤務・コロナ禍で、職員同士のコミュニケーションがさらに難しくなりました。日々の支援の悩みなどを話し合い、子どもたちへの支援に活かせる会にしましょう。

「話しあいでそだちあう環境づくり」＜報告者＞児童心理治療施設 ももの木学園 児童指導員 野村 佑理 氏

つばさ園・ももの木学園は、話し合いを大切にしています。何かあれば、職員と子どもが全員集まり全体会を開き、職員や子どもの困りごとや悩み事を共有し、問題解決を試みています。つばさ園・ももの木学園の実践を報告します。